

文化・芸術

「花」

1940年、油彩、ボード
27・0cm×22・0cm

モーリス・ユトリロ

(1883～1955年)

パリで生まれ育った、エコール・ド・パリの画家モーリス・ユトリロ。生まれつき体が弱く、また不安定な生活の中、10代でアルコール依存症になりました。その治療のため、数多くの画家のモデルを務め自身も画家であった母ジュザヌ・バードンに勧められ、独学で絵を描き始めます。生まれ育ったパリの街並みや酒場、教会などを独特の哀愁に満ちた情景で描き続け、中でも白を基調とした作品は評判となりました。

本作のような鮮やかな花の小品は、ユトリロがリュシー・ポーウエル夫妻と知り合った1920年ごろから描かれ始めます。のちに夫を亡くしたリュシーと35年に結婚してからも、祝日や誕生日に夫人や親しい友人に花束の絵を描いて贈りました。本作も夫人の旧蔵品。私的な、花束のプレゼントであった本作からは、温かみがあふれています。

本作は宇都宮美術館で8月18日まで開催中の「大川美術館コレクション」による20世紀アートセレクション」でご覧いただけます。

(大谷)

《名画の扉》

大川美術館コレクションから

